

アンドレ・シェニエの政治的散文(三) : 「ジャコバン党」

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332785>

出版情報 : 文學研究. 66, pp.101-110, 1969-09-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

アンドレ・シェニエの政治的散文(三)

—「ジャコバン党」—

永 田 英 一

革命の中の詩人アンドレ・シェニエ¹⁾は、一七九〇年八月、最初の政治論文「フランス人民に告ぐ」²⁾によって、自由と祖国の真の敵「政治的タルテュフ」の群を摘発し、ついで一七九一年四月「党派精神論」³⁾において左右両派の「狂乱と没義道」を烈しく攻撃したのであったが、その後も「モニター」や「パリ新聞」などの紙上で、もっとも恐るべき破壊分子にたいし、大胆不敵な挑戦をやめなかった。ここに取りあげた「ジャコバン党」⁴⁾の一文は、一七九二年五月「パリ新聞」の政治欄に発表されたもので、シェニエのいやまず愛国的熱情と古代的市民・詩人の勇気を生々しく表現していると思われる。

- 1) André Chénier (1762—1794)
- 2) *Avis au peuple français sur ses véritables ennemis* (1790) 「文学研究」第五十輯参照。
- 3) *Réflexions sur l'esprit de parti* (1791) 同右第五十五輯参照。
- 4) *Le parti des Jacobins*. この論文は一七九二年五月十一日号(附録六十六号)の「パリ新聞」に「書簡」として自費で寄稿された。

アンドレ・シェニエの政治的散文(三) (永田)

*

「私は今日リールのある市民から一通の手紙を受けとったが、その中でかれは私にこう尋ねている。「憲法の最良の友とそのもっとも激越な敵どもが『ジャコバン党』にたいしてほとんど同じ考え方と同じ憎しみをもってているが、これは不可思議千万なことだ、どういう特殊事情によるものなのか。このことは（とかれはつけ加える）自分にはパラドクスと思われるが、『パリ新聞』でどうか解明して頂ければ幸いである。」私にはいともお安い御用である。私はかれの質問する事実の真实性を認め、そして『ジャコバン党』という言葉で私が理解しているのは、今日までこの名の教会に集ったすべての個人では決してなく、真に一つの『党派』を形造っている連中であることを告げればよいのだ。連中はこの種の団体結社のあらゆる活動工作进行を指導し、さまざまプランや管理権をもち、そしてフランス中に散在する同じような無数の結社集会和広汎な連絡を保ちながら、かつて地上に存在した、もっとも破壊的な、もっとも反社会的な同業組合を組織し、育成しているのだが、私はこうした組合の存在する限り、また私の存在する限り、これを追及することをやめないであろう。

おそろくりールの市民も疑っていないように、また慧眼の士なら誰でも疑わないように、われわれを悩ませる無政府状態とフランスが急速に近づきつつある完全な崩壊との責を負わさるべきなのは、ひとりこの党派であるとするならば、また好んで『憲法の友』と称しながら、いまだ憲法にたいする露骨な、あるいは陰險な攻撃や激烈な宣言によってしか頭角を現わさず、つねに法について語りながら、法を無視して

法を作り、愛国者と称して法にそむくものなら誰でもこれを擁護し、つねに自由について語りながら、集会、広場、劇場、教会、さては住居においてまで、すべての人の自由を乱暴に侵害したり、毎日、所有権にとつて脅威的な、激しい愚行に拍手を送り、そして財産を掠奪する盜賊のあらゆる群を擁護し、あるいは弁明するのが、この党派であるならば、また到るところに恐怖、疑惑、不信を撒きちらし、自己の誓いに忠実な、そして法の履行者である、すべての団体、すべての裁判官、すべての將軍、すべての市民を憎み、かつ告発したり、兵士を隊長にたいして武裝蜂起させ、破廉恥な不規律を「公民道德」と呼んで、フランスの名にとつて恥かしい（そしてリールの町もその舞台となった）さまざまな残虐行為をひとりで引起し、すでにこれを糊塗し、やがて賞揚するのが、この党派であるならば、これら一切をなすのがこの党派であるならば、それがすべての真の憲法の友に、すなわち正義と人間性と、法と国家の名譽のすべての友に、正当な憎しみを抱かせるのは否定することができないのだ。

また他方、新しい秩序が気に入らぬ人々、そしてその不満があえて叛逆にまでゆく時には、法によってのみ罰せらるべきすべての人々、またさらに、ただ金持で名門の出であったが故に、その不満を非難された多くの人々が、もしこの同じ党派の百千の横暴な気まぐれに曝されたのであれば、またもしこの党派が故意にこれらの人々のために、憲法と正義に基づく法律以外の法律を創作し、かれらを絶望、逃亡、犯罪に追いやったのであれば、またもし暗殺者の群がかれらの住居に火を放ち、その財産を強奪蹂躪し、そして多くの場所で、かれらが打たれ、虐殺され、引裂かれ、時には喰われ、そしてかれらの妻や娘たちが侮辱され、鞭打たれ、暴行され、時には惨殺されたのであれば、そしてこの党派が、あえてこれらすべての

行為を完全に是認しなかつた時には、少なくともこれを犯した悪党どもを「人民」と呼び、そして「人民は取乱していたのだ」などといって、連中にたいする寛容を吹込もうとしたのであれば、また、ついで最初の印象が少しうすれてくると、世にも傍若無人な厚顔さで、こうした行為を否認したのであれば、また今日、善良な市民、血も涙もある人々、そして祖国を愛し、かつ大言壮語する偽善者、憎むべき行為の煽動者を愛さぬ人々が、同市民を法の規制に、公正堅固な政治に、すなわち自由に立帰らせようと欲して、そして苦渋と苦痛をもって同市民に、少数の食人種がフランスの名譽を汚した、こうした恐るべき残虐行為のすべてを想い出させる時、もしこの同じ党派がこれらの人々を公衆の敵意へ告発し、かれらは自由、憲法を憎み、「人民を中傷する」といって非難するならば、かくも多くの罰せられざる残虐行為の犠牲者、あるいは犠牲者の身内や友人たちが、これらすべての暴虐を引起し、それを正当化した党派を憎むのは、たしかに不可思議なことではない。また善良な市民が憲法と人間への愛から憎むところの連中を、憲法の敵どもが恐怖や復讐心から憎むというのも決して不可解なことではない。

けれども私になされた質問の第二点は、たしかに若干の説明を要する。憲法の敵どもが、特に「そのもっとも激越な敵ども」が、憲法とフランスそのものを今にも破壊しそうなこの党派をかくも烈しく憎むというのは、正確には真実ではない。そして、もし敵意ある將軍たちや、あるいはそれほどでもないフランス人の口から洩れた言葉——「あの党派は自滅するだろう。手ごわいのは立憲派だ」という言葉——を思い出そうとするならば、また、もし某元大臣によって今年出版された憐れな小冊子¹⁾——あの一般行政においても、著述においても、反革命的な企画においても、つねに輕薄で凶々しいうぬぼれが才能の代りをす

ると考えたらしい男のパンフレット——に眼を通すならば、われわれの敵どもの中には、われわれを紛碎するために、外国の軍隊よりもこの徒党の狂気じみた救援に大いに期待すべきだと本能的に感知している連中が若干いることを確かめられるであろう。そしてもし、いつの日か、こうした騒々しい群衆の演説家が一人ならずフランスの敵どもと金儲けの連絡を保っていることが露見したとしても、私はたしかにこれを異とする人々の数には入らないであろう。あるものは、フランスの王座に英国王の子息の一人を招くべきだという²⁾。他のものは、黄色い令状をもって軍隊を追出された兵士たちで部隊を編成したいという³⁾。こうした百千の破廉恥と不条理が、そこでは毎日滔々と弁じられているのだ。私は喧騒な激情にかられた愚行が、こういう精神錯乱の域に達しかねないことを否定するものではない。けれども、このようにみづから進んで憎悪と恥辱に身をささげる連中が、あのゾピール——主君のためにある町を手に入れようとして、おのれの鼻や耳を切取ったゾピール——に似ることもまたありえないことではないであろう。要するにわれわれの敵どもは、この党派から恐るべきものは多くないが、これに負うところは大きいにありうるのだから、かれらがこれを憎むというのは決して保証の限りではない。そしてかれらの中で、この党派を憎む連中も、そのために私が指摘した理由を必要とするにすぎないのだ。

若干の誠実な市民は、打勝ちがたい嫌悪が、祖国を愛する人々と祖国を寸断し、しかもこれを愛すると称する人々とを離間しているのを見て、歎き悲しんでいる。これらの市民は不可能なことを望んでいるのだ。なぜなら、率直、勤勉、公德心と、偽善、怠惰、そしてそこからもたらされるあらゆる悪徳との間に、いかなる結合がありえようか。法にのみに従うことを欲する人々と、法が自分たちに従うことを欲する人

々とを、また主人を欲しない人々と、自分たちが主人でなければ、たちまち奴隷の身分だと叫ぶ人々とを、いかなる絆が近寄せることができようか。歎き悲しむべきなのは、決して、正しい人々が攪乱者どもと団結していないということではなく、自分たちの間で互いにそうしていないことだ。なぜなら、もしそうすれば、攪乱者どもは息を切らせるか、沈黙に陥らざるをえないであろうし、フランスはもはや敵をもたないであろう。

私はリールの市民の質問に答えたと思う。どうか私にいった下だった親切な事どもにたいする私の感謝の意をうけられたい。この問題について熟慮反省すればするほど、かれは次のことを固く信じるであろう。すなわち、すべての市民がかれのようになる時、そして、かれの手紙の的確な表現を用いるならば、すべての市民が「一切の団体党派の精神を憎むが故に、いかなるクラブにも、いかなる政治結社にも属さない時」その時にこそわれわれの祖国は安泰かつ自由になるであろう。」

(五月八日、アンドレ・シェニエ)

- 1) 「フランスの政治記者からドイツの政治記者への手紙」 *Lettre d'un publiciste de France à un publiciste d'Allemagne, 1791.* 元財務総監カロンヌ (Calonne) は、この小冊子の中でフランスにおける反革命のプランを開陳した。
- 2) 「愛国年報」 *Annales patriotiques* の編集者カラ (Carra) は、一七九二年一月四日のジャコバン党の集会で、ルイ十六世が再び逃亡を企てたならば、イギリスの王子をフランスの王座にすえるべきだと主張して、ダントンの制止された。
- 3) ロベスピエール (Robespierre) は、同年五月一日の集会で、革命以来軍隊から追われたすべての兵士でもつて

愛国部隊を編成することを提案した。なお一七九二年までは、笞刑をうけた兵士に黄色い除隊令状 (Cartouches jaunes) が交付された。

4)

ペルシアの太守。みづから鼻、耳、唇などを毀損して、バビロニアの町に潜入し、これを国王ダリウスの虐待に よるものと訴えて、信頼させ、軍の指揮を委ねられると、軍隊と町をあげて国王に引渡した。(Cf. Justin, I, X.)

なお、文中の「リールの市民」については不詳。

*

見られる通り、アンドレ・シェニエは、たまたまりールの一市民から受けとった手紙を口実に、ジャコバン党にたいして新たな攻撃を加えた。憲法の「最良の友」とその「もっとも激越な敵ども」の、この徒党にたいする感情や態度の説明は別として、眼前に横行する法と秩序の破壊者の群、そしてその「罰せられざる残虐行為」は、シェニエの思想的立場と人間的感情からして、とうてい許されざる狂気の沙汰であった。しかもそれはつねに愛国と「人民」の名においてなされ、祖国と革命の大業を破壊しているのだ。かれは一切の無法と非人間的行為を糾弾し、特にその卑劣な教唆者、煽動者を禁圧するために、真に自由と正義を愛するすべての市民に一致団結することを訴える。

シェニエは自由と誠実を愛し、一切の偽善と「党派精神」を憎んだ。かれはこの論文の少し前にも、同じ「パリ新聞」に「愛国的結社について」の一文を寄せ、「愛国者」と称する狂信者どもを論難するとともに、公正な「自由人」に奮起をうながしている。

アンドレ・シェニエの政治的散文(三) (永田)

「公明正大な自由人よ、いかなる名簿にも登録せず、憲法と法と、そしてこれなくしては永続的な法のありえない正義と人間性のほかには何の旗印もたない人々よ、諸君は決して意気阻喪してはならない。惨禍と苦悩のたくも多くの萌芽を根絶するのは、諸君のなすべきことだ。攪乱者どもの陰謀をあばき、かれらを看視し、追及し、その仮面をはぎ、仮借なく徹底的にやっつけるのは、諸君のなすべきことなのだ。大胆不敵な真実は、諸君の口をかりて発言し、あらゆる人々の勇気をかき立てるであろう。真にフランス人民である、この国民の莫大多数者は、自己の方向を見極め、ついに口を開くであろう。そして悪党どもは自己の非勢に怖気づいて、諸君に散々暴行もはたらいた後に、かれらの泥沼へ帰るであろう。」*

(一七九二年四月二十七日)

* 「愛国的結社に」 Sur les sociétés patriotiques, 29 avril 1792 (60° suppl.)

また同年六月十四日の「パリ新聞」でも、シェニエは「ジャコバン党員の策動」について痛烈な非難をあげ、断乎としてかれらと対決する決意を表明している。

「卑劣、残酷な山師どもよ、おのが祖国の死刑執行人よ、君らが祖国になした害悪、なしつつある害悪、また準備している害悪を、これを未然に防ごうとした人々になすりつけるのは、いかにも君らにふさわしいことだし、真理と人間性の声を同市民に聞かせるために、毎日、君らの中傷と圧迫に闘わねばならない人々にたいして、あの被圧迫者の勇氣と潔白を装うのは、いかにも君らにふさわしいことだ！ 憲法の陰險な敵どもよ、君らは憲法を履行せず、これを履行するものを妨げる。一切の憲法の公然たる敵どもよ、

君らはおのれの利害のほかに法をもたず、おのれの欲望のほかに正義をもたないからだ。自由人の義務は、たとえ何事が起ろうとも、公正真実であることなのだが、この義務につねに忠実な人々を非国民として告発するのは、いかにも君らのやりそうなことだ！……

私のいうことは、もっぱら真実であることを証明するためであって、まるで犯罪のようにわれわれに問われる連合協力について、言訳がましく弁明するためではない。というのは、もし天が下に、残忍卑劣な欺瞞、偽善、詐欺、野心を追及し、打碎き、殲滅することをその精神、その唯一の祈願とするような団体が存在するならば、私は堂々とこれらすべての団体に加入し、そしてこの名誉ある事業において、全力をあげて奉仕することを約束する。

さらに……私を「貴族」とか「廷臣」とか「オーストリア人」とか、また「人民の敵」などと呼ぶならば、私はかれらにただ一つのことを答える。すなわち私は喜んでかれらのために、かれらに気に入る何にでもなるであろう。但しかれらの罵詈雑言によって私がかれらと同じ人間でないことが十分に証明されさえすれば、私がかれらに似ることほど大きな不名誉を考慮することができない。そしてかれらが私にどんな呼び名を与えようとも、もしそれをかれらと共にするのでなければ、私はこれを十分に名誉あるものと思うであろう。*

(一七九二年五月十日)

* 「ジャコバン党員の策動について」 *Des manoeuvres des Jacobins*, 14 juin 1792 (suppl. 89 bis)

*

アンドレ・シェニエは、その後ますます尖鋭化する社会状況の中で、なおも「団結の必要」を説き、同時にジャコバン党を烈しく追及、論難することをやめなかった。かれは直接ブリッソー、コロ・デルボワ、カミーユ・デムランなどを名指してこれと対決し、弟ジョゼフをも容赦しなかった。そして自分の文章にはすべて署名した。

革命ジャーナリズムにおけるシェニエの、こうした大胆不敵な闘争は、すべて祖国の「安泰と自由」のための「愛国的寄与」であつたが、また「多少の危険を伴なつても」、正義と真実を侵す連中に挑戦することは「高貴な喜び」であつたにせよ、今日のわれわれから見ても時に慄然たらしめるものがある。前述の一文「ジャコバン党」において、「黄色い令状をもって軍隊から追出された兵士たちで部隊を編成したい」と提案したのはロベスピエールである¹⁾。当時このことは周知の事実であつたが、シェニエはあえてこの「破廉恥と不条理」を告発し、さてはジャコバン党の首領たちが宮廷に傭われた裏切者であるかのように説いた。

果して、若き市民・詩人アンドレは遠からず「人民の敵」として断罪され、断頭台に上るであろう。その運命の日——共和暦二年テルミドール七日は、ロベスピエール失脚の二日前であつた。²⁾

1) 一〇六頁註3)参照。

2) テルミドール(熱月)九日には、ロベスピエールが失脚して「恐怖政治」が終つた(テルミドール反動)。ついでジャコバン・クラブも閉鎖された。なおシェニエの処刑の日は一七九四年七月二十五日である。

* 本稿のため用いたテクストは左の諸版である。

—Becq de Fouquières, *Oeuvres en prose d'André Chénier*, 1872.

—Louis Moland, *Oeuvres en prose d'André Chénier*, 1879.

—Gérard Walter, *Oeuvres complètes d'André Chénier*, 1950 (Bibl. de la Pléiade)